

「ところか」
790^{12/8}
816^{1/2}

ふり ね
振 1965^P
かたな 刀子 紀上 278^{3行}
801^P
紀上 260¹ 7.8¹
278¹ 12.6¹

紀上 277^P 未
ひびこ = ひまご 1888^P 紀上 277^P
直ちに 1374^P
846^P

清彦の神宝献上

垂仁八十八年（五九）七月十日、天皇は群卿に詔し、

「私は、新羅の王子天日槍が初めてやって来た時に携え持ってきた宝物が、いまも伊都国にあり、その国の人々から貴ばれて神宝と水でりると聞いた。私は、その宝物を

見たいと思う」と仰せられた。

その日に、使者が伊都国へと出立した。

天日槍の曾孫である清彦は、勅をうけたま

わると直ちに、参内し、神宝を捧

げて献じた。（以下、垂仁紀、垂仁記、神記、第一表等参照）

ところか、清彦は、天日槍が持ってきた宝物のうち、出石の小刀と名づけられた一振

の刀子だけは、たやすく献上できなると考え

自らの袍の中に隠して、自分が帯びていた。

天皇は、また小刀を隠した事情をお知りにならないうちに、清彦をもてなそうとお召しにな

紀上 277^P 5行

え 1163^P

え 711^P

紀上 277^P まいご
え 2065^P まいご

紀上278^P

803^P-1/2

大平 自害に果てる

紀上278^P

紀(四)199^P

紀上278^P

ろけん 露刃 事案

紀上278^P

かたな 小刀 小剣

△小刀(小剣)を隠した

ということが露呈したとき、清彦は事態

の重大さを思い、自害を決意したのであろう。

寶存(清彦を拍置していた御倉)から小剣

(清彦)が失せていた。清彦は、我が子の清

(父)と同名が多遅摩毛理の弟、清日子とあ

る。のとろへ立ち寄った日の翌朝、失せ

てしまったようである。第八章「今日槍伝説」の項参照

このところ、垂仁紀八十八年七月条には

このように記されている。

△(神宝を皆神府に蔵めた後に)空府を閉

きて視れば、小刀自づからに失せぬ。則ち清彦

に問はしめて曰はく、爾(と同一名の父)が献る所の力子の

△爾が献る所の刀子、父清彦のことであろう

う。忽に失せぬ。若し汝の所に至るから

とめたまふ。

清彦答へて曰さく、

昨日、刀子、自然に臣が家に至る。乃ち

明日失せぬ。小刀

とまうす。

かたな 小刀 801 16行

令和元(2019)12.12(木) ~ 12.14(4回)

紀上278^P 末5行

彦 小枝370
知ン783^P

803^P - 7/2

清 小林576^P
大カン1344 小 小林320^P
知ン639^P

天皇、則ち惶りたまひて、且更覓めたまは

とある。

●因みに述べると

①小剣の日小は、吳音・漢音共に、^{ニハヤシトイフ}「セウ

シヨウ」と訓む。(「漢和辞典」小林信明

小学館)へ小「大字典」上田万年「講談社」(参照)

②清彦の日清は、吳音で「シヨウ」と訓

む。(「漢和辞典」小林信明、小学館)へ清

参照)

③清彦の日彦は、吳音・漢音共に、「ゲン

と訓む。(「大字典」上田万年、講談社、

△彦(参照)

という。

では、小刀(小剣)は、その後どうなった

とある。

■垂仁紀ハ十八年七月条に、

是の後、出石の刀子は、淡路島に祭られる

ことになった。その島の人は、神だと思っ

て、その刀子のために祠を立てた。

と記載されている。

元1878「ひとたまりもない(一溜)一休」806- $\frac{1}{2}$ に13
ひたまりもない(一溜)一休 804P
増減 363P
身悶 2132

福能か主君にない874
557.10.3(2)
あるは806- $\frac{1}{2}$ 799

使作す32とあり
紀上 260「278」 348P
永正 770- $\frac{1}{2}$ 1230- $\frac{1}{2}$
906- $\frac{1}{4}$ 363P
878

田道間守

伊都国の王位を継いだ清彦の子・田道間守

は、伊都国と伊都国との間に微妙なギクシヤ

クした空気が漂うのを感じた。微妙なギクシヤ

田道間守の心は、恐ろしく震えた。禍根は、伊都

父清彦が小刀を隠したその禍根は、伊都

国の将来に、大きな影響を与えるに違いない

もしかたら、この伊都国の存在すら危うく

なつてゆくかも知れない

田道間守は、憂え、天を仰いで身悶えした

奴国と決裂状態になれば、伊都国はひとた

まりもなく壊滅するであろう。

へ私は、この伊都国の国王として、何をな

すべきなのであろうか

田道間守は、自らの答えを探し求めた。

ここに田道間守は、垂仁天皇への拝謁を願ひ出

て、誠の真心を示した

大王の爲に、生命を賭してつくしたい

と申し上げた

⑧800P

805P-1/2

おもむく
在

329

常世の国
④64.85 2112
紀元280

紀元279P 記(国)153
⑧817P

垂仁九十年(六一)二月一日、天皇は、
田道間守に命じて、常世国へお遣わしになり、
非時の香菓(橘)を求めさせになつ
た。
すなわち田道間守は、万里の波濤のかなた
の絶域にあると、いう常世国、閼越国へ
赴くことになった。
閼越国は、東海海中の倭
の女国の人々にとつて、心の大きなよりとこ
ろとなつてゐる大切な所、神聖極まりなところ
であつた。
なつかしくのばれる常世国、倭人達の心
の故郷というべき、閼越国の地は、いま、ど
うなつてゐるのだであらうか。
その有様をいつかり見届けたい。
越国へ確かに行つた証の品として、非時の香菓
(橘)を持ち帰るように求められた。
もつとも、この時、田道間守は
数年間もの長きにわたり(五八年以降

⑧800P
687

805^P-2/2

退りしもの

①799^P 光武57年明帝崩 ②800^P 3年後
③799^P-1/3 557

三年間はかり倭国内に逗留していた後漢
からの使者を丁重に送り還すとともに、
新帝の第二代の明帝に方物を貢ぐ厚く詔
恩を答謝する
と、このことが表向き、田道間守に課せられ
た任務であつたかも知れない。
・あるいは、
へ正使である倭人とともに、副使として田
道間守が派遣されたのだろうか
とも思われるが、詳細は分からない。

*

え
1582

漢詩 258

806¹/₂

「漢詩 258」
旺文社
頼山陽

大分の高穴鉄字 ⑦ 791¹/₃
果行天皇の成り代り。重仁天皇は、
率の奴口を都よりにて

「かろ」
前頁より

へ帰国する

を乗せた

■後漢からの使者と田道間守の乗る船は、極

南界の奴国（肥後国）宇土地方の岸辺を離れ

やかて天草と島原との間の海峡（早崎海峡）

を通り抜けて、外海へ出た。

■眼前には、東シナ海の大海岸がはてしなく

広がっており、天と接している。

■送るかなたの西方水平線上をのぞむと

何やら低くうっすらと尾をひいて浮ぶもの

があった。

■「雲か山か……吳か越かし

田道間守は、目を凝らして、と見詰め

つづけた。
（頼山陽「天草洋ニ」参照）

米

天啓改行

「日本経済史」
6/7 第 6 部 総合選法

1 纸 2 本

806^P - 2/2

断陽 1414^r
悲しみに甚えぬこと。——の足
あかすやう 813^r - 3/3

というのだから、——この頃（六一年ころ）未だ帯方郡（帯方郡）は存（存）在（在）しなかった。（『日本史辞典』東京創元社）（帯方郡・楽浪四郡）（参照）

頃、その南半部を割いて、蒔方郡を設置した。
 後漢末に於て、東浪郡を支配した公孫康。

*なお、**東浪郡**は**前〇八〇三三**は、**前漢**の**武帝**が**衛氏朝鮮**を滅ぼして、**今の平壤付近**に置いた**郡**である。**（古倭記）****東浪郡**参考

田ともあれ、後漢の使者と田道間守とは、
浪郡の太守を拜謁したに相違ない。

た
の
で
は
な
か
ら
う
か
。

の思おもいふを振はりはつて玄海げんかい難なんへこ蒼そうぎだ出し、いつ

$\bar{z}_1$ 1965⁺
 $\bar{z}_2$ 1822^v
 $\bar{z}_3$ 703^p

ともすは涙にくれる臣下の者達にこまこま
としたことを指示し、その後断腸

たがあるいは、田道間守は、伊都国王として
当然の二として、先か伊都国へ立ち寄り奉と思

存
 い
 恐
 之
 伊
 都
 国
 王
 ち
 ま
 り
 い
 わ
 ば

りつゝいたのか、
「それは何処にも
記されてい

垂仁天皇の命を承けた田道間守が、
 とうとう^{ろくろ}経路をとって常世国^{とこよのくに}（閼越^{かいつ}）にたどり

すい
て
か
う
41
た
ち
ま
も
り
い
っ
た
い

9

越いられ

⑤538¹/₂
⑥538²/₂

807P

⑤339¹/₆ 東洋史 683P

うけんを
百廿七
明帝 永明 53
⑤192
⑤819P
298P

②朝鮮半島を歴て、中華の都「雒陽」に到る。た田道間守は、後漢の朝廷において貢献し、詔恩を答謝した。とであらう。（「魏志倭人伝」正始元年条。同四年条。末尾の「政等」の還るを送らむ。参照）

③「吳越の地を目指した。」
 ④「かつて、吳国の都があったという太湖の東岸あたりは、この当時（後漢当時）に「吳郡」に属していた。（「東洋史辞典」創元新社）

⑤「無錫」他参照）
 ⑥「吳郡」の蘇州（江蘇省吳県）や、そのすぐ近くの梅里（江蘇省無錫県東南）あたりには立ち寄って、あたりを見わたしてみたり、聞いてきた昔日の吳国の都の面影など、もはや残ってはいなかった。（第六章「吳国の台頭」）

⑦「いかゞゆゑに、この付近で目にする風俗と、倭人達の習俗とは、どことなく似ているように思われた。」

⑧「後代の北魏滅亡後（六世紀）に書か

（？）のけりて

（？）のけりて

項

落陽から3244「こ」云834
「ま」云2073
同又 362-3/8
種と芽を食用。

572^P-1/3

828-3/2
989-2/2

808^P
小本1022^P
572^P-1/3

572^P-1/3 同又
630^P

落陽から3244^P
上柳

楚云1219^P
「おさめ」2665^P
「つて」2666^P

かブがブ、解の黄をク千ヤク千ヤ。魚に網う

水たものであるか。口洛陽伽藍記（卷第二）に「江南（南京あたり）の風習に
関しての興味深い記事がある。
概略、こう記載されている。
①君長はさんばう髪で、民は入墨。中原の言葉が混ってはいるか、閩・楚の土語は改まっておらず、ちっぽけな冠帽に、ちんちくりんの着物。おの水を阿農と言ひ、ふたこ
と目には口阿比の連発。
●呉の地方では、左来、
の姓や名や字の上に「阿」をラけて呼ぶばかりでなく、阿翁（祖父）・阿父・阿婆（祖母）
阿母・阿兄・阿姉・阿誰（だれか）等々一般の人称代名詞にも、これをつけていたのであろう。
（第六章「阿姉」の項において既述）
●「阿」は、日本で、お父さん・お母さん・お姉さんなどという場合の「お」に相当する言葉であろうか。
第六章「阿姉」の項において既述。
②さらに続けて、現代日本に見られる風習と同様の事柄が述べられている。
「菰の芽と稗が代用飯。じゅんさいの莢美を

809P-2/3

- ・カラー
- ・右頁の右上(半頁)に
掲載下さい。



110G
右つめ

日本各地の池沼に自生する

130G

140G

写真図版 193 (ゆんさい (スイレ科))

日本各地の池沼に自生する

『薬草カラー大事典』伊澤一男、主婦の友社、平成10年4月20日発行、175~176頁参照

12
0
4

・春から初夏にかけて、若芽や若葉は、ぬるぬると粘液質を分泌する。透明で寒天のようなものに包まれているのを摘み取り、生のまま、三杯酢や汁の実にする。その淡泊な味が、なめらかな舌ざわりとともに賞美される。 733P

809P 3/3 上

・カラー
・左頁の左上(本頁)に
掲載下さい。



・洛陽ガラン記
44頁

13QG

14QG

写真図版 194

『^ひ菱^ひおよび^ひ菱^ひの実』

『^ひ菱^ひの実』

11QG 平した果実(菱の実)

大花 21

『薬草カラー大事典』伊澤一男、主婦の友社、平成10年4月20日発行、463~4頁、他参照

12QG

・夏、白色4弁の1日花を開き、花後は水中に沈んで、鋭い突起をもつ堅果を結ぶ。種子は食用

734P

阿家 628

The character '米' (rice) is written on a four-line grid. It consists of a vertical line and two diagonal lines crossing at the middle line. The top of the vertical line reaches the top line, and the bottom reaches the bottom line. The diagonal lines extend from the middle line to the top and bottom lines.

(2) また、人々は深山に高床式の家を建て、
住んでいたが、それは倭国の貴人達の住居と
似たような作りであつたと思われる。
田道間守は、ふつと、自分が奴国に居るよ
うな錯覚をさえおぼえろつた。
「かく、聞くところによると、閩越の人々
が尊崇する首長（曰阿家と称される君長）
は、この東冶に居ないという。
田道間守は、尋ね尋ねて探し求め、
うやく浙江省南部の瑞安（温州のすぐ南）あた
りで、その首長を探し当てたのではなからうか
（曰後漢書曰「東夷伝」の注、曰太平御覧曰
卷七ハ〇に引かれる曰臨海水土志曰「倭人
伝を讀む」森浩一、中公新書、九四頁参照）
第六章「阿毎」の項において既に「阿家」を
【阿毎】、そして【阿家】を参照）

貨布（布の商い）

大田守 216
343P

三味
五-53
倭人伝を説く
99P

三味
五-53

閩越の民の首長らは、田道間守が語るに、倭

人達のことにつけての話を、恐らく耳を疑い、

大いに驚いたことだろう。

へ太伯の血筋を引く呉王、閩越王の子孫

が、東海を後に、東遷して、大海を隔て

た東海の島で、倭奴国の国王となり、君

臨んでいる。

というのである。

閩越の首長をばとめとする人々は、遠路は

るばる訪ねてきてくれた。その倭王の使者が

田道間守を懇ろにもてなし、倭国から持

ってきたという布地などを買い上げてや

ったのではなからうか。

木但し、布地などの対価として支払わ

た。貨幣が、倭国内で流通したとは考

えにく。

木田道間守は、単に、中国の貨幣を倭奴国へ

土産として持ち帰ろうとしたのだろうか。

木い、橘の実の代金として支払った可能性もある。

輔火竹 42' 三口友 Ⅲ 53' 同 未 淨 ⑧ 808' 39
 孫 推 18 人 係 在 疎 達 99' 同 友 赤 1346' 165

元
1149^p

元 8
1580

⑦ 344
未~

タイ
④
344

なお、第二章「澶洲」の項に於て述べたが、

日
三
國
志
卷
八
吳
書
吳
主
傳
第
二

孫権伝の黄龍二年(二三〇)条

に 注記して述べる、次のようになる。

諸葛直とを派遣し、武装兵一万を率いて海を

渡らせ 夷洲（台湾）と亶洲（倭国）によつて
討滅さる以前の箕子の国の呼称か）に赴

か
せ
た
口

亶洲は、大海の中にある。

この亘洲にカりて老人達はこう言い伝ふ

て
い
る
と
いう
真に
腰し
び
ひく
め
どう
う
な
人

秦始皇帝が方士徐福に命じて童男

童女  数千人を率いて渡海させ、

神山(阿蘇山)のふもとにかゝるとそのこにある仙臺

を捜^{さぐ}せ^せた。その時^{とき}、徐^{じょ}福^{ふく}た^たち^ちは、この道^{みち}

(賈洲) に留まゝて歸つてなかつた。世々

相承けで数万家ある
通(とお)へ
(みせん)

ハミなお既ニ述ベたようである
肥前国佐賀郡

8/2^r 2/3

⇒ カット

- ・カラー
- ・右頁の上粉
に大きく
載せて
下さい。



↓
カット

↓

⇒

アキハタ せんせいのたのしみ写真図版 195 金立山 (501m) ^{きんりやさん}
全国神話・伝説の旅 吉元昭治 勉誠出版 2009年1月20日発行 502頁参照 738^r

⑧ 805^p - 1/2 614
816^p 末45 714
25 ~ 210 迄 969^p

「また」この頁7行

812^p - 3/3

三国史(策)Ⅱ-53^p ⑧ 743^p

倭人伝を流む99^p 地名辞576^p
⑧ 344^p
⑧ 345^p

六十一(一)年(一)は、後漢時代(二五)二二〇(一)
また、田道間守が常世国へ赴いた西暦
の金立山に(一)徐福が来投したという伝説が
ある(一)里真図(一)195^p (一)金立山(一)参照
その上(一)土の誤りで、(一)賈洲(一)のことであらう
の人民(一)あるいは(一)田道間守のことであらう
か(一)が、時に会稽に至って、貨布(一)布の商
い(一)をしたことがあつた。
また、会稽東(一)冶(一)県の人(一)饒速日命(一)
および初代倭王(一)の(一)か(一)が海行し、風に
遭つて流移し、(一)賈洲(一)に至つたともいう。
ハ(一)賈洲(一)の(一)所在(一)は絶遠にして、(一)衛温(一)と諸
葛直(一)らは(一)卒(一)に至る(一)ことが出来なかつた。ただ
夷洲(一)台湾(一)から数千人の住民をつれて歸つ
てきただけであつた
と解される。

③346^p

③346¹⁰

③346^p 同文

③346^p 同文

③346^p 同文

改行

改行

20

改行

の初期にあたり、後漢時代のこ
とを記述した。後漢書に東夷伝にも、
ほぼ同じく、
（瀛洲の人）会稽へ至って、市した。
という逸話を掲載している。
会稽の海外に、東鯤人（不明）有り、分
して二十餘國と爲る。又、夷洲（台湾）及び
瀛洲有り。
伝え言う。
秦の始皇、方士徐福を遣わし、童男女数
千人を將いて海に入り、蓬萊の神仙を求めし
むれども得ず。徐福、誅を畏れ、敢て還らず。
遂に此の洲に止まる。
と。
瀛洲では、世世相承け、数萬家有り。人
民時に会稽に至りて市す。会稽の東、治の縣人
海に入りて行き、風に遭いて流移し、瀛洲
（箕子達の百余國のこと）と思われ、に至る
者有り。所在絶遠にして、往來す可からず。
というのである。（第二章 瀛洲）の項において既述
ともあれ、

414
344

812^{1/2} 813^{2/3} 817^{1/2} 949
 348^{1/2}

812 1759

へ瀛洲(箕子達)が支配する百余国(の極南
 界に位置する倭奴国)の国王(垂仁天皇)の勅命
 によつて、倭人達の故郷日会稽(ハヤツキ
 太田道間守は、――倭国から持参した布な
 どを売つたのであろう。
 と想像される。

*

すなわち、
 日三國志(おおよび)後漢書に

「貨布す」(布の商いをする)

「市す」――それでは

と記されてゐるが、いったいどんな布を売つ
 たのだろうか。

①あるいは太田道間守は、
 日会稽(ハヤツキ)の地から東海の島(マサ)に移り住んだ倭人

正

「契緣」

⑧ 816-3/2

同文 1225^P 1771.3/4

三才圖會II-308上 女王同の出現 295°
魏方係 $\leq 1^\circ$

$$\text{魏方强} \in 1^0$$

2453

↑ 經上35

$$813^P - \frac{3}{3}$$

もんろう 紋様 2209^p はたより 機織 1989^p

「織りあけ」

の子孫に

云 335 F

との共通点



③とちまたあり、田道間守は、
へう魏志倭人伝の正始四年条に記され
るような布下（ひもと）つまり、倭国が魏国へ
上献したという倭錦（わにしき）と絳青練（こうせいれん）と
帛布（ひくふ）と異文雜錦（いぶんざしき）と同等の品々を携えて
ゆき、貸布（かひ）したのであろう（中国人が見たことのない文様の錦）
と想像されるが、そうした布の詳細については
今のまですなから分らない。

② さらにまた、田道間守は、
 一般民の子孫達が機織の技術を受け継いで織
 った珍しい紋様の布（例えば、寶棺内から見
 出されるような各種の絹織物）を取り出して見せ
 てくれた織物を市にした。✓
 ことであつたらうか。

⑤ 真四版 19 参照

達^{てき}か織^{いうあ}りあげた布^{ぬの}を見^みせ
 閩^{びんえん}越^{えん}地方^{ちほう}の伝^{でん}統^{とう}
 的^{てき}な色^{いろ}合^あい^や模^{えも}様^{よう}や織^おり方^{かた}など^なを^を示^めし、
 閩^{びんえん}越^{えん}の人^{ひと}々^々に⁶⁰²近^き親^{しん}戚^{けき}を^を抱^{いだ}か^かせ^せて^{あき}商^{あき}つ^なた^た

③ 816 由 818
 1/2 220
 1/2 定
 と 5 行
 こ け
 も 7
 元 な
 子 い
 り か
 こ
 い
 なる
 い

コクヨ ケー20 20×20

吉野ヶ里古墳 742 ④ 357^P - 3/5 (2) ↑
 板倉系段丘の縁に新やま(1) - 336^Pあたりに

帰還 812

改行

む 2146
小袋 826

う 219
280 814

「そんなに急いで帰国せよともよろしいではありませんか」
「そうですよ。ごゆっくりしていつて下さい」

「何という甘さだろう」
「とはいえ、田道間守は、そうそう長居出来な
かった。心は早くも故郷にあつた。」

剥き、小袋を破くと、黄色い果汁がほとばしつ

香果（橋の実）は美しい黄金色に甘酸っぱい香気を

秋が深まっ、てゆき下、やかて黄色い非時の

田道間守の帰途を襲った異変

541

303

148

色付いて

少しずつ

279

743

H18.7.13 (木) ⑤
H30(2018)12.12(水)

① 842P 9H

(改訂)

改行

815^P

12. 1688

紀上280

惜お

AD 61年に倭国を去る。
1191年に帰国。

な

F 12/13
12/13

✱

いとさかんに長逗留をすすめる首長等の言葉を振り
切るようにして、田道間守は別れを告げた。
人々は浜辺にまでやってきて心から田道間守との別離
を惜しんだ。田道間守は立ちあがり、
波に揺らぐ船の上の両手を高くとあげて
ふる田道間守のその手には、八竿八纒の非
時の香果(串刺しの団子)のように、いくつもの
橋を串に刺した竿八つと、乾し柿のように
いくつもの橋を縄にとりつけた纒八つが、
しっかりと握りしめられていた。
中国大陸の東岸に冷って北上すれば、安全な時間がかかりすぎ
温州あたりから東方へ船を漕ぎ進めば早くしか
自ずからに倭国(肥後国)へたどり着けるだろう
田道間守は、逸る思いを抑えることが出来
なかつた。
武夷山脉の山なみ
次第に遠のいてゆくについに海原の牧間に消えた。
異変が起こった。あるいは、
橋の実が熟すころ、襲ってくる秋の台風を巻
き込まれたのかも知れない。
気が付いた時、田道間守は、どことも知れない
小島に漂着していたのであろう。

1582

P

1967

紀上279P

945^{P-1/2}
816^{P-2/3}

945^{P-1/2}
同文

やせこいのてきふのやせこいの
紀上362^P 紀上340^P 宇瀬 ほか
945^P 同文

定か 813^{P-3/5} 177
天つき
改行

御の月が述べられてゐるのではなからうか
とも思われるが、確証は無い
※尚、参考までに述べると、応神天皇が誕生
された所について、
□神功撰政前紀には、日筑紫の宇瀬
□応神即位前紀には、日筑紫の蚊田
とある。
①あるいは、
△複数の応神天皇があられてゐる、あるは
皇は日筑紫の宇瀬で出生（もしくは龍名）と
別の
応神天皇は日筑紫の蚊田で出生された
という事なのかも知らない。
垂仁紀九十九年（七〇）十二月条によると、
十二月十日に垂仁天皇を葬り申し上げ
た
という。
口とちあれ、隠された真実を正確に復元する
のは非常に困難である。

紀上279^p

816^p-3/3

⑨945^p-1/2
HV

と
い
う
。

た
し

■ 垂仁紀九十九年(七〇)十二月条によると
十二月十日に、垂仁天皇を葬り申し上げ

*

元すゝともあれ、
元するのには、非常に困難である。

② その他のにもいろいろの解釈が出来る。た

蚊田であつた。

か加高塚から甦え、て襲名された所は、筑紫の

地は、筑紫の宇彌にあり、
何代目かの心神天皇の実際の誕生の

(2) それとも

「ところてん」
① 789^{P-4/6}
② 828^{P-1/2}

高田 636
万里の波濤
③ 805^{P-1/2}

はとう
波濤 云 1804^P
大み 817^{P-1/2}

重仁 748^P ④ 805^{P-1/2}
年 後 子 遅 小 ー

紫宸殿前の右近の橋
⑤ 1761^{P-3/7}
⑥ 1479^{P-1/2}

橋
たち は な

2012

垂仁天皇崩御の翌年（七一）、三月十二日（埋葬して三ヶ月後）に、田道間守が、常世国から帰ってきた。

それは、垂仁九十年（六一）に倭国を出発してから、何と、実に十年後のことであつた。つまり、垂仁天皇の勅命を、少々遅れはせながら、田道間守はついに果して帰還した。

田道間守は、あの非時の香菓、八竿八纒を常世国から肌身離さず、命かけで守りとおし、万里の波濤を越え、倭国へ戻つて帰つてきたのだつた。

と、ころで、球磨川下流南岸、山麓あたり、帯を高田といひ、ここは、高田みかんの金。高田みかん（ハ代みかん）は、全国で栽培されてゐるみかんの元祖であ

557.10.7 援木 甘美 505°
 H3.8.9 援木 実る 2129°
 H10.1.31 援木 1478°

DNA 1761P-2/8
 817-2

蘭草 1829-3/4
 テレビで言っていたか?

記上 219「命せ」とある
 280°

とわわわっている。(「熊鷹第一編」垂仁天皇「既述」)
 この「高田」の地には、次のような伝説がある。
 「垂仁天皇のころ、田道間守が中国から橘
 三つを持って帰朝し、高田の地に来ておられ
 た景行天皇にさしあげたので、天皇はこの地
 に植えられた」とい
 う。
 ・つい最近まで、高田みかんの原木とされる
 みかんの大木が残っていたが、今は枯れてい
 まった。とはいえず、地元には保存会ができてお
 り、原木から枝分けされた木が、順調に育っ
 ている。(「熊本の伝説」角川書店、九六頁
 他参照)
 甘木精之・牛島盛光・奥野広隆・浜名志松、
 *

もつとも、果汁が多くて甘い実を結ぶ橘
 の枝を援木や挿木したものでなく、
 田道間守が中国から我が国へ携え持ち帰ってきた

新や
 (1)-66上

接木 抄木 抄木 抄木

改行

左

750

地方係 同文
1124 ⑤ $1479^{\circ} - \frac{1}{2}$

③ 统纪(保)⑤-81^P 北村
1 (向)⑥-160^P 北村 8/8^P - 2/2

Sfile 818^p-3/2 ④ 1761^p-4/7 右近の掃 ④ 1761^p-3/7
参考主証 ④ 816^p-3/3

という。(「朝日新聞」平成十四年一月二十一日付へ花おりおり「ミカン」参照)

② また、「長島」についての解説を見つめる

と「先仁天皇の宝龜九年(七七八)十一月十三日条に

「長島は、続日本紀」西仲島と記し、当時

肥後国天草郡に属していたが、空所後期の永

禄年中(一五五八―一五七〇)島津忠兼これ

を略取し、以来、薩摩国に属す

と述べている。「帝国地名辞典」太田

為三郎、名著出版へ長島参照

橘はぐもととも肥後国南半部(球磨川下流南岸)や長島あり

一帯で栽培されていたのではなからうか。

① な お、
 長い年月のうちの
 実をつける木が見
 出されたものと
 思われ
 る
 質が良く、
 中国江南の
 柑橘の名産地
 温州
 長島は、
 鹿児島県最北
 端に位置して
 いる
 横ためる島
 である。

改行

74
1642^P

1761 元禄 24 年 南門の略
1759 元禄 22 年 南門の略
1758 元禄 21 年 南門の略

と主たるもの
田畑にある
⑦ 1761¹/₂ ありたがわ
2044 有田(41)800

ガムニウヤク¹ 176^P 47
元帝親孝 ⑤ 176^P 0
チカン¹ 162^P 通りでは少あかい

年月のうち、やがて偶然にも甘い橋の更を
ける木が見いだされたのかも知れない。
そして、肥後国南部地域の橋の木や、苗は、
次に示すとおり、門外不出とされ
て、手厚く保護されつづけたのであろう。
その後醍醐天皇（**米**）**虎関師錬**（臨濟宗の僧。一三七八〜一四〇
七）**紀州蜜柑**の歴史は古く、**元亨釈書**（**推**
古朝）**元亨二年（一三二二）**迄の**仏道**に**関する諸事**
を記述した書を見ると、**紀伊国有田の僧、高**
井の伝記に柑子蜜柑のことがでてくる。しか
し、実際にはその文字ほどには甘くなかったらしい。
二月、人とうの意味での**紀州の蜜柑**は、それか
らず、とあと、**戦国騒乱**の**天正二年（一五七四）**
に、**糸鹿庄（有田市系我）**の**伊藤孫右衛門**が、
肥後八代（熊本県八代市）から、**二株の蜜柑**
を密かに持ち帰ったからだという。
●**紀州蜜柑伝来記**には、この二株の苗木
を持ち帰るについての苦心が、産業スバ
イもどきに記されている。●**当時、他国との物**
交流、通商貿易が禁じられていた時代であり
苗木を持ち出すのは**容易で**なかつた。●そこで

20X20

752
1573 だの全何月 心

たの
愉む
天つぎ
改行

小林
401^P
改行
2/130^P

一計を案じた孫右衛門は二鉢の盆栽をつくり、
この花を愉しみたいゆえと役人に送り、
ようやく持ち帰ったのだという。
「かし、長祐に苗木はやつれ、国許へた
りつくなり一株は枯れてしまった。孫右衛門
は、のこる一株の苗木を祈る思いで育てあげ
この蜜柑が、以降の幾多の風雪をくぐり
抜け、有田川の兩岸の山々をうすめつくす壮
大な蜜柑畑の木々になったのだ」とされる。
・とはいえ、この蜜柑伝説に異説がないわり
ではない。が、それはともあれ、糸ヶ原あた
りに自生していた蜜柑の原木に孫右衛門が
持ち帰った優良種の苗木を接木し、改
良に改良を加えて、広げていったのであろう。
・「孫右衛門百方苦心繁殖をはかり培養接
木術を尽くした水は下十有余年を経、慶長元年
の頃には近村近郷に増殖、その果実を大坂、
伏見まで輸出するようになったと紀州徳川
家の史書にいう。
そして、孫右衛門が考案したり有田蜜柑がその

82/P-1/2
 (A) 2/10/18
 (B) 8/18-1/2 9/9

名を天下にひろげるのは、寛永十一年（一六
 三四）、境川の藤兵衛、人よんで蜜柑藤兵衛
 が四百貫の蜜柑を江戸へ出荷して以来のことである
 ・尚、江戸中期の紀伊国屋文左衛門（一七
 三四）の船出は、これよりはるか後年である
 ④また、天正の頃に孫右衛門が植えた蜜柑樹
 の五代目の木が、いまもその伊藤家の裏山の蜜柑
 園にあるという。（紀州歴史散歩）神坂次郎

(*)

肥後国球磨川以南の地と
紀州有田川丘陵の地とは、地形・風土などよ
く似ているようである。(第18・19回参照)
うした点が幸いして、長年にわたり肥後
で育てられてきた橘が、紀州有田川付近で
繁殖し易かつたのかも知れない(田真図版196へ和歌山県有田市の家系相組参考)
またさらに述べると、
肥後国八代から紀伊国
田道間守の殉死

田道間守は、重仁天皇がお崩れになられたと
 有田へ蜜柑の木を移植した。というこの話は、倭奴国が肥後国に
 在った。ということを強く示唆しているように思われる。

小林 334

コクヨ ケー20

821^P-2/2

・カラー

・左頁の右上(表頁)に
大きく掲載して
下さい。



130G.

140G

写真図版 196 和歌山県^{ありた}有田市の^{みかんばやし}蜜柑畑

『植物の世界』第3巻、朝日新聞社、1997年10月1日発行、3-198頁参照。

やまと803-9/10 557, 10, 7 ① 3473 ② 4358 ③ 2258 ④ 1655 ⑤ 280 ⑥ 280 ⑦ 280 ⑧ 280 ⑨ 280 ⑩ 280 ⑪ 280 ⑫ 280 ⑬ 280 ⑭ 280 ⑮ 280 ⑯ 280 ⑰ 280 ⑱ 280 ⑲ 280 ⑳ 280 ㉑ 280 ㉒ 280 ㉓ 280 ㉔ 280 ㉕ 280 ㉖ 280 ㉗ 280 ㉘ 280 ㉙ 280 ㉚ 280 ㉛ 280 ㉜ 280 ㉝ 280 ㉞ 280 ㉟ 280 ㊱ 280 ㊲ 280 ㊳ 280 ㊴ 280 ㊵ 280 ㊶ 280 ㊷ 280 ㊸ 280 ㊹ 280 ㊺ 280 ㊻ 280 ㊼ 280 ㊽ 280 ㊾ 280 ㊿ 280

聞いて、嘆き悲しんだ。田道間守は、涙なかに、こういうのだった。
御命令を大王からうけたまわって、遠方の絶域へまいりました。万里の波濤をこえて、はるかたに弱水（遠くはるかかな河川）を渡りました。その常世国は、神仙の秘區、俗のまわれりとこうではありません。
るのに、自ずから十年が経過してまいりました。それにより、また本国へ戻ってこれると思つた。乗り越え、また本国へ戻ってこれると思つた。となと出まゝ、聖帝の神靈によつて、ついに歸まされ、大王がお前になり、復命するとは出で来ません。私が生きておりましても、また何の利益がありません。ようか。
田道間守は、垂仁天皇の陵にまいり、大声で泣き叫んで、自ら死した。（垂仁紀）
すなわち、垂仁天皇のあとを追つて、田道間守は殉死した。
●垂仁記には、次のように述べられてゐる。
多た遅摩毛理をもちて、常世の国に達はし

H18(2006)7.18 ⑤
 H30(2018)1.22 ~ 25(5回)
 令和元(2019)5.12(田) ~ 5.12(3回)
 令和元(2019)12.12(木) ~ 12.14(4回)
 令和2(2020)8.16(日) ~ 8.17(4回)

824^P

→ S60.6.21 ⑤

注!!
 整8748m!

祀(里)153'三宅車等か祖
 紀上280'
 375

8/17
 8/16

群臣は、その声を聞いて、
 田道間守は、三宅連(う)橋守・糸井造の如
 祖である。(重仁記)重仁紀で第一表参(照)
 大王の位についたのは、重仁天皇(末代)の
 第一子でなく、第三子だったのであらう。
 皇の御世となつたのかも知れない。(第一表参
 皇の御世となつたのかも知れない。(第一表参